

# ツールとしてのディベートによる英語力育成

問 田 雅 美

Improving High School Students' English Skills Using Debate as a Communication Tool

Masami TOITA

This paper reports on how to make use of English debate to improve high school students' English skills. English debate is said to be an effective way to provide students with various skills: reading and researching a topic, examining the matter from different perspectives, writing logically, speaking effectively, and also responding properly to the questions asked by the others. Through doing various activities involved with English debate, students have increased their motivation and improved on the above skills. There is still room to improve, but we have been developing a course for teaching English with debate as a communication tool.

<キーワード> 英語ディベート, コミュニケーションツール, 英語力育成, 教科横断型指導, ライティング力向上

## 1 はじめに

岡山県にある私立A高等学校の、生命科学分野への進学を目指すAコースでは、平成18年度より、学校設定科目「実践英語」として、将来、英語の文献を読み英語で発表を行う機会が多い理系の生徒に、論理的な思考力と英語の運用能力をつけることを目的として、多読による英語理解を中心とした授業を行ってきた。山田(2008)は、それまで多読経験のない生徒にとって、多読は読解力向上に初年度において最も効果があることを指摘している。しかし、多読により文献を読みこなす力はつけられても英語で発表する力まではつけられないため、論理的な思考力の育成だけでなく、英語を表現の手段として使いこなす力の育成には、他の方法を取り入れる必要があった。そこで、さまざまな技能を統合的に使用する活動であるディベートが、英語運用能力を高めるための手段、すなわち「ツール」として有効ではないかと考え、平成21年度より「実践英語」でディベートを取り入れた指導を開始した。

ディベートという活動は、平成21年に告示された『高等学校学習指導要領』には出て来ない。しかし、『高等学校学習指導要領解説外国語編英語編』では、「英語表現II」の内容として、ディベートなどを通して異なる意見がある話題について自らの立場をはっきりさせ、自説が優れていることを説得力を持って述べ

る活動、と具体的に提案されている。ディベートに取り組むことにより英語での表現力を伸ばすことが期待されているのである。

様々な学びのイベントを「祭り」と捉えている三熊(2012)は、「学び」の技術的側面(英語の場合は語彙や文法を覚える、発音を練習する、英文を暗唱するなど)は、「祭りの準備」として位置づいてこそ効果上がる、と述べている。大きな発表会や大会での活躍を目指すことで、練習にも一層身が入り技術の向上につながる、という意味だと解釈した。A高等学校では、ディベート導入初年度から毎年6月に「科学英語研究会」を開催し、高校2年次における「実践英語」の公開授業を行っている。そこで、公開授業で行うディベートそのものに加えて、そのディベートに向けた準備段階の取り組みを「一連の活動」と考え、それが英語力の向上にどのような効果があるのか検証したいと考えた。

そのためには、長期にわたる系統的な指導が不可欠となる。高校生用の英語ディベートの教材では小林(2012)によるテキストがあるが、高校生用の教材自体、数は少なく、大会出場を目指す経験者向けのものが多いのが現状である。Hansen(2007)は大学生レベルであっても、ディベート初心者用の教材は無いに等しく、初心者への指導を行うには、既存教材の内容やレベルを調整することが重要である、と述べている。そ

のため、指導対象が理系の高校生で英語ディベート初心者であることを考慮し、興味を持ってディベートに取り組める独自の教材と指導計画が必要となると考えた。

そこで、本研究では、生命を題材としたディベートを用いた英語力育成を目指して、授業での実践を通してディベートの有効性を検証し、効果的な指導内容とその方法を探ることを目的とする。よって、次の2点を研究課題とする。

- (1) ディベートを行うことは生徒の英語表現力を伸ばすことに有効であるか
- (2) ディベート指導のための教科横断型指導計画を策定できるか

## 2 研究方法

A高等学校Aコースにおける平成22年入学生17名の高校1年次から高校2年次（平成22年4月～平成24年3月）までの2年間に焦点を当て、授業での取り組みをもとに、生徒の気持ちの変容、また英語力の伸びからディベートの有効性を検証する。ここでいう「ディベート」とは、ディベートを行うための様々な活動とディベート対戦からなる一連の活動と考える。「英語表現力」とは、(a)コミュニケーションに対する積極性、(b)発音・発表態度とその場での即興的な応対に関わるスピーキング能力、(c)論理的な内容構成のできるライティング能力の3点に絞って考える。

また、生命科学分野のディベートに必要な知識や問題意識を持つための指導、他教科で実施しているスピーチ・ディベート・プレゼンテーションの指導を、英語のディベート指導と関連付けた、長期的な指導計画を立てるとともに、他教科での学習内容や時期を調査し、協力を依頼することとする。

### 2.1 授業での取り組み：平成21年度・平成22年度（本研究以前）

本研究を開始するまでに2学年がディベート学習を行った。平成21年度の第1回研究会では、“You should use embryos for experiments.”という論題でディベートを行った。題材が難しいことに加えて、十分な事前学習が実施出来なかったことにより、ディベートが成立したとは言い難い結果になった。そこから、課題として、取り組みやすい題材の選定、英語力の養成、系統的なディベートの練習が必要であることが分かった。そこで、次年度はより多くの時間を配

当し、理科の授業と関連した題材を選び、社会科でディベートについて学ぶなど、1年次の3学期より教科横断型を意識した指導を行った。翌年の第2回研究会では生徒自身の調査活動を題材とし、“We should stop keeping animals as pets in Japanese elementary schools.”という論題でディベートを行った。事後のアンケートからも、「自分の調べた内容だったので言いたいことがはっきりあって、取り組みやすく、頑張れた」など、生徒にとって身近な論題を扱うことがモチベーションを高める効果をもたらすことが分かった。

### 2.2 授業での取り組み：平成22年4月～平成23年6月（第1段階～第4段階）

高山西高等学校英語科（編）（2007）で指摘されているように、ディベートをしたことのない生徒が準備もなくいきなり英語でディベートの対戦を行うことは困難である。そこで平成23年6月の研究会の公開授業でディベートができるよう、表1のように、段階的に計画を立てた。

表1. 平成22年度～23年度「実践英語」授業計画（抜粋）

段階	学年	学期	実践英語授業（週1時間）	他教科（科目）との連携
1	1	1	多読	社会科（現代社会） 英語科（オーラルコミュニケーション） 国語科（現代文）
2		2	ブックレポート発表会 暗唱コンテスト	
3		3	ディベート基礎学習 反論・質問・要約練習（英語） 模擬ディベート（日本語）	
4	2	1	調べ学習 立論作成・反論予想・根拠収集 練習ラウンド 第3回科学英語研究会公開授業	理科（生命） ホームルーム活動 英語科（オーラルコミュニケーション）
		2	ポリシーディベート パラメンタリーディベート ディベート講習会	英語科（ライティング）
5		3	ディベート大会	

まずは英語に慣れるため、第1段階として多読からの指導を始めた。次に、第2段階として、各自の読んだ本の内容・感想を英語で発表させたり、課題のエッセイを暗唱させたりして、人前で英語で話す練習を行った。その後、第3段階としてディベートの学習を行った。当時入手出来た資料の中で、高等学校での初期段階の指導について具体的に書かれていた、高山西高等学校英語科（編）（2007）を参考に、英語での要約、反論、質問といった各活動に特化した練習を行うとともに、日本語でのディベートも行い、全体的な感触をつかむなど、形の練習を中心に行った。平成23年4月から、6月のディベートに向けての第4段階に入

り、論題を“Japanese people should have a license to keep pets.”と決め、準備を開始した。週1回の授業だけでは準備が進まないためディベート合宿を行い、賛否両方の立論を作成した後、くじでサイドを決定した。生徒の英語力を考え、立論、反駁、総括はシナリオを用意するが、ゲーム性を残すために質疑応答では相手に知らせない質問も入れることとし、その後授業でシナリオ作成、質疑応答準備などを行った。公開授業の前にもう一度ディベート合宿を行い、発音や話し方などの練習を集中的に行った。合宿後のアンケートでは、「みんなと一緒に頑張りたい気持ちになった」、「上手になって絶対にディベートで勝ちたい」と、前向きな気持ちが見られた。また、公開授業後のアンケートでは、「合宿では上手く出来なくて泣いてしまったが、悔しさを乗り越えて頑張ったことが大きな自信になった」との声もあり、合宿がモチベーションを高めるきっかけになったようである。

## 2.3 第3回科学英語研究会:平成23年6月25日(土) (第4段階)

### 2.3.1 公開授業

第3回研究会の公開授業にあたり、英語表現力の評価を考えながら、本時案を作成した。本時の目標として、①各自が積極的にディベートでの役割を果たす、②簡潔で分かりやすい英語を用いて、自分(たち)の意見を述べる、③相手の意見を聞き適確な質問をする、④ディベート後にまとめとしてディベートに関する意見を英語で書き発表する、という4点を設定した。授業でのディベートでは、生徒たちは今までになかった質問をするなど、積極的な取り組みが見られた。結果は肯定側の勝利であった。

ディベート後のまとめでは、(1) What is the most impressive thing you found during the research for this debate ? (2) What do you have to do to improve your English performance ? の2点について、各自の意見を書かせた。生徒たちの弱点は語彙力不足であることが今までの指導から明らかになっていたため、useful termsとして、あらかじめ用紙の下にくっつか役立ちそうな語句を載せておいた。4分後、書かせた意見を発表させた。(1)に関しては、自分が担当した部分の内容を利用して意見を書いた生徒が多かった。英文を見てみると、“When I read the book, I was surprised that a great deal of animals has been killed. I think that euthanization should

be decreased.”といった、ほとんど誤りのないものから、“I think that increasing awareness among pet owners that they are taking care of a life to reduce euthanizations.”のように、言いたいことは分かるが上手に文章化できていないものまで様々であった。(2)に関しては、“I think I have to speak more clearly and powerfully.” “I should correct my pronunciation and intonation. Then I can tell audience my opinion effectively.” “We have to think meaning of the sentences and not being nervous.”などの意見が出た。正確さの観点からは誤りが多く含まれているものも見られたが、各自で自分自身のこれからの課題を見つけ出して表現しているという点は評価に値する。

発表の場では、文法的な間違いを修正するのではなく、“OK. You think…”と正しい表現で繰り返すにとどめ、提出させたワークシートを添削して返却した。今回は間違えることを恐れずに英語を使わせるという点を優先したが、やはりある程度の正確さがなければ、伝えたい内容が伝わらない。生徒のやる気を失わせないように、より分かりやすく伝わりやすい表現への訂正の程度と傾合いが今後の課題である。

### 2.3.2 研究協議

公開授業後の研究協議において、題材設定の理由、今までの取り組みの紹介、今回の授業のために工夫した点、今後の展望を発表した。また、各活動を記録したビデオの中から、特に変容の大きかった生徒の成長ぶりが分かるよう、暗唱コンテストの時点から2回目のディベート合宿に至るまでを5分程度の映像に編集して紹介した。

参観者の方々からは、「今日に至るまでの経緯が文面のみではなく、話や映像で大変分かりやすかったです。理想的な形(最終的な形)に至るまでのご苦労や工夫なさっている点などが大変参考になりました」、「公開授業に感銘を受けました。生徒たちの伝えたい思い、達成した満足感が伝わってきました。こうして自分たちが英語だけでなく、様々な意味でstep-upしたことでしょう。私もこのような体験を生徒に踏ませたいと思いました」などのコメントをいただいた。また、「原稿の英語には教員の手は加わっているのか」や、「実践英語における縦のつながりや横の連携はどうなっているのか」という質問が出たため、これまでの取り組みを答えた。

運営指導委員の先生からは、「生徒は楽しそうにやっていた。英語はロジックがしっかりしていることが大

切なので、もっと伸ばしてもらいたい。また、最後の生徒のコメントにもあったが、being confidentということがとても大切である」という助言をいただいた。図1、図2に示すように、事後のアンケート結果からは、生徒、参観者とも、ディベートの取り組みに肯定的であることが分かった。

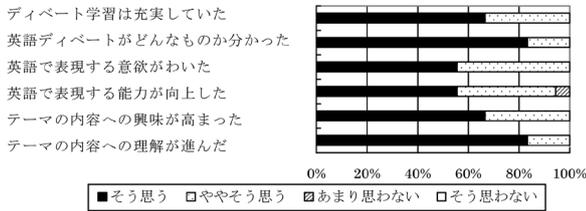


図1. 研究会直後の生徒アンケート

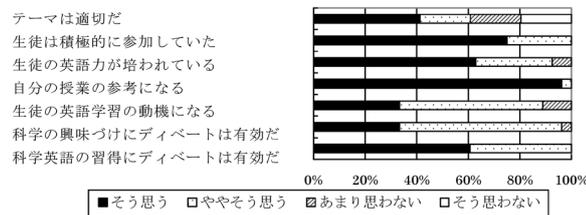


図2. 研究会直後の参観者アンケート

## 2.4 授業での取り組み：平成23年2月～平成24年3月（第5段階）

第4段階までに分かったことは、生徒たちは準備した内容を時間をかけて練習すれば上手に「発表」することはできるが、その場で考えて質問したり反論したりすることには課題があるということである。そこで、即興的なやり取りの練習のため、パラメンタリーディベートに取り組むことにした。中川（2008）のテキストを使用して、ディベート講習会を行い、ディベート大会を行った。今までと違う点は、毎回ディベートの後に日本語での振り返りの時間を設けたことである。言いたいのに言えなかった内容を説明したり、相手の言った内容の確認などを行うことで、議論の内容を理解できているかを確認することにした。この時間は大変盛り上がったが、英語力の向上を目指すためには、内容の確認だけでなく、上手に言えなかった内容を、英語でどう言えば良かったのか考えさせたり、ある事例を全体で取り上げて、何を主語にすれば言いたい内容を簡潔に表現できるのか、また別の表現ではどう言えるのかなどを考えて発表させたりすれば、より良い活動になったはずである。今後の課題としたい。

## 3 結果と考察

### 3.1 研究課題(1) ディベートを行うことは生徒の英語表現力を伸ばすことに有効であるか

#### 3.1.1 生徒の気持ちの変容をもとに

(a) コミュニケーションに対する積極性について、生徒の気持ちの変容を見るために、ある生徒の感想を追った。

表2. 生徒Aの感想（時間を追った変化）

時期	感想
暗唱コンテスト後（第2段階途中）	最初は嫌だったけれど頑張れたと思う。しかし、緊張して覚えていたのに出てこなかったりした。
1年次終了時（第3段階終了）	人前で話すことにもっと慣れる必要がある。
第2回ディベート合宿後（第4段階途中）	合宿前と今とは少し自信もつてきたし、だいたいできるようになったと思う。これからの練習でつらいこともあるかもしれないけれど、チームのみんなと協力して頑張りたい。
公開授業後（第4段階途中）	最初は不安で一杯だったけれど、本番は今までで一番良く出来たと思う。
2年次1学期期末テスト「ディベート学習を振り返って」（第4段階終了）	ディベートをしたことで、発音が悪くても自分がこれを伝えたいという気持ちがあれば、相手に伝えることが出来るんだということが分かった。 ディベートで伸びた力は、意見の伝え方、相手の意見を聞く力。
第1回ディベート講習会後（第5段階途中）	改めて努力することの大切さが分かった。自分の思ったことを英語に直すのは本当に大変だったけど、英語力をつけるためには良い方法だと思う。
第2回ディベート講習会後（第5段階途中）	前よりは話せたと思います。けれど、チームの意見をまとめつつ、相手の反論も同時に行うのは、まだ難しい。

表2に示したように、感想からだけでは気持ちがどう変わったのかははっきりとは見出しにくいものの、第2段階の暗唱コンテスト以前は人前で話すことが嫌だったのに、第4段階終了の2年次1学期期末テストの時点では、ディベートの効果を認めるとともに、前向きな態度に変化していることが分かる。

生徒Aは、1年次の第3回英検2級二次試験において、小さな声で自信なく答えてしまった。結果は不合格であった。しかし、ディベート学習を経た公開授業後の2年次第1回では見事合格した。「ディベートの練習で大きな声ではっきりと話したり、自分の意見に理由をつけて述べる訓練をしたことが役に立ったと思う」とのことである。英検の二次試験では、自分の立場を表明し理由を述べなければならない質問が出題されるため、ディベートで常に理由をつけて意見を述べる練習を積んでおくことは英検対策としても有効であると言える。このような積極的な方向への変容は、個人差はあるがどの生徒にも見られた。今回、生徒の取

り組む姿勢を数値化することはできなかったが、次第に積極的になっていった様子が明らかに観察された。

- (b) 発音・発表態度とその場での即興的な応対に関わるスピーキング能力について、発音や発表態度は、ディベート合宿のように目的を持ち集中的に練習を重ねることでかなりの向上が見られた。しかし、その場での即興的な応対に関しては、パラメンタリーディベートを行ったディベート講習会の感想からも分かるように、ハードルの高さが感じられる。现阶段では、即興的な応対の力がついたとは言えない状態であり、一層の練習が必要であるものの、練習を積みことで向上は期待できる。

### 3.1.2 ライティング能力の伸びをもとに

- (c) 論理的な内容構成のできるライティング能力に関して、ディベート学習が効果をもたらすかどうかを見るために、GTEC for STUDENTS（以下GTECと略）の得点の変化や定期テストの結果を検証した。

まず、Aコースの本格的なディベート学習開始以前（平成23年2月）と第3回研究会以後（平成23年7月）のGTECの得点と全国平均を比較した。比較において、Aコースを集団Aとする。全国平均とは該当学年の過去3年間の全国の受験者の平均である。

表3. 1年次2月と2年次7月のGTECの得点の比較（平均）

集団	トータル		リーディング		リスニング		ライティング	
	1年	2年	1年	2年	1年	2年	1年	2年
A	461	499	181	177	172	200	108	122
全国	408	443	151	165	155	172	102	105

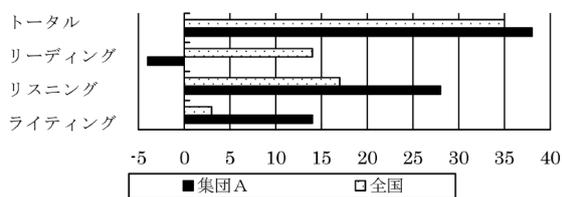


図3. 1年次2月～2年次7月のGTECの得点の伸び（平均）

表3から分かる得点の伸びを図3に示した。注目し値するのは、ライティングの伸びである。GTECのライティングでは、書いた英文の分量に加えて使用語彙・表現や、論理的展開などが総合的に評価されるため、ディベート学習における論理的表現練習の効果があつたのではないかと推察される。

そこで、ライティングの伸びが「実践英語」の成果かどうかを検討するため、A高等学校のAコース（集

団A）と、A高等学校のBコースで、文系の国公立大学への進学を目指すクラス（集団B）の「ライティング」の定期テストの結果を比較した。この2つの集団は、「ライティング」の教材、時間数とも同じで、授業者は異なるが同じ指導案で授業を行っている。英語の他の科目に関しては、教材、授業数、指導者ともに同じであり、違いは「実践英語」の有無のみである。

「ライティング」の授業で使用している教科書には、各課の演習問題の最後にExpress Yourselfという、自分の意見を述べる課題がある。集団Aでは、「実践英語でのディベートで学んだ、主張→理由→まとめの形で書くように」という指示を出し課題に取り組みさせた。一方、集団Bは、指示することなく課題に取り組みさせた。テスト範囲として複数のExpress Yourselfのうちいずれかを出題することを予告しておき、2年次2学期期末と3学期期末の定期テストにおいて、同じ問題のテストを行った。

表4. 「ライティング」定期テストの平均点とExpress Yourself部分の平均点

2年次定期テスト	集団	平均点 (標準偏差) <100点満点>	Express Yourself 平均点 <3点満点>	(参考) 英検取得人数			
				準1級	2級	準2級	3級
2学期期末	A	55.8 (18.2)	2.50	0	2	14	1
	B	61.1 (19.3)	1.86	1	5	11	0
3学期期末	A	61.1 (17.4)	2.13	0	4	12	1
	B	71.9 (14.1)	1.87	1	5	11	0

表4に示したように、テスト全体の平均点は2回とも集団Bが上回っていたが、Express Yourselfの部分は集団Aの得点が高かった。これは、「ライティング」の定期テストに多くの文法・語法問題が含まれていたことにより、問題演習の得意な集団BがExpress Yourself以外の部分で多く得点したためだと考えられる。しかし、ディベート学習を行った集団Aは、全体の平均点が低いにも関わらずExpress Yourselfで高い平均点を出している。ディベート学習により、論理的に意見を書く力の向上に効果があつたと言える。

では、ディベート学習はライティング能力の向上だけに効果があつたのであろうか。そこで、集団Aが本格的にディベートを行った第4段階～第5段階の期間の学習が、英語力の向上にどの程度影響しているのか、第3段階終了時である1年次2月と第5段階終了時である2年次の2月のGTECの得点を比較した。表5に示すように、1年次は集団Bが全ての分野で得点が上回っていたが、2年次は集団Aが全ての分野で、上回るか同点であった。伸びを見てみると、図4のようになる。同期間のGTECの各分野の伸びを比較すると、集団Aがどの分野でも得点を伸ばしており、定期テス

トでは測りにくい実践的な力を身につけていると考えられる。また、リーディングやリスニングの伸びも見られ、GTECでは測れないスピーキング能力は除くものの、ディベート学習により、ある程度総合的に力がついたことが分かる。

表5. 1年次2月と2年次2月のGTECの得点の比較 (平均)

集団	トータル		リーディング		リスニング		ライティング	
	1年	2年	1年	2年	1年	2年	1年	2年
A	461	546	181	200	172	223	108	122
B	497	532	194	187	192	222	110	122

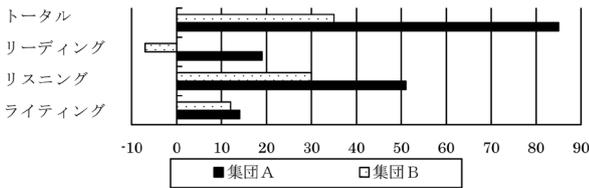


図4. 1年次2月～2年次2月のGTECの得点の伸び(平均)

### 3.1.3 まとめ

上に述べた結果から考え、ディベートを行うことは生徒の英語表現力を伸ばすことに有効であるか、という研究課題(1)に対しては、「有効である」という結論である。ディベートに向けて、そこで求められる技能を指導することは、生徒に表現手段として英語を使う自信を持たせるとともに、自分の意見を積極的・論理的に伝えることの出来る英語力を育成する一助となると言えるからである。

### 3.2 研究課題(2) ディベート指導のための教科横断型指導計画を策定できるか

今回の取り組みを通して、国語科(現代文)の「意見文を書く」活動との連携が効果的であることが分かった。また、理科(生命)との連携も背景知識獲得に効果的であった。しかし、英語のディベート指導計画がきちんと出来ていなければ連携も困難となる。今回の指導計画をもとに反省点を見直し、より効果的な指導計画を策定し直す必要があるだろう。また、それに沿ってディベート指導が出来るテキストの作成も必要である。生徒の置かれている環境に沿ったディベートテキストを作成することで、どの部分にどの教科のこういった指導が連携可能かを検討しやすくなるからである。

ディベート指導をより効果的にするために欠かせない教科横断型指導であるが、そのためにはまずは指導する側のコミュニケーションが必要である。英語でのディベートの取り組みを通してお互いに理解と協力をし合える関係づくりが出来れば、より効果的なディ

ベート指導に向けて、さらなる効果が期待できると言える。

そのため、ディベート指導のための教科横断型指導計画を策定できるか、という研究課題(2)に対しては、英語を軸とした指導計画を十分練り、教師側のコミュニケーションを密にすることで「可能である」という結論である。

## 4 今後の課題

繰り返し様々なトピックでディベートを行うことで、語彙の習得や意見を述べること、相手に質問したり、尋ねられた質問に答えること、反論を基に意見の立て直しをすることなどは出来るようになって期待できる。しかし、現状では、一見言いたいことをしっかりと述べているようであっても、相手に十分理解できる英語で表現出来ていないこともある。そのため、英語科の他の科目の授業との連携を密にし、基礎となる英語力のさらなる向上を図ることが今後の課題である。

また、ディベート学習を経た生徒が、身に付けた力で何を出来るようになればよいのかも考える必要がある。ディベートを取り入れた目的は、ディベートのプロを育成することではなく、生徒が実際の英語でのコミュニケーションの場面においてディベートで身に付けた技術を表現手段として活用できるようにすることである。実際のコミュニケーションの場面では、ディベートのような一方の立場に固執し主張することは少なく、相互理解のために話し合いを進めることがほとんどである。ディベートでは合意を形成することが求められていないため、たとえ問題を解決する良い案が提案されてもそれぞれの立場の主張で終わってしまう。そこで、ある程度ディベート活動を行った後に、ディベートで異なる側面から論題を考え、相手の意見も聞いた上で生まれてきた「自分の意見」をスピーチにまとめ、質疑応答を含めたプレゼンテーションを行ったり、ディベート後と同じ論題で課題を解決するためのディスカッションを行ったりしてみたいと考えている。ディベートで身につけた力をどう活用するかを考えて、ディベートを英語学習にどのように位置づけていくかが今後の課題である。

## 謝 辞

本研究は日本学術振興会科研費  
(奨励研究No.23908022)の助成を受けたものである。

## 参考文献

- Hansen, J. (2007).  
Teaching debate in Japan: A review of resources  
and materials to meet the demands of teaching  
Japanese English learners. *Osaka Jogakuin Junior  
College Bulletin*, 37, 77-78.
- 小林良裕 (2012).  
『初めての英語ディベート 授業用テキスト (教員用  
指導書CD-ROM付き) [Introduction to Debating in  
English Book 3]』茨城: 密林社.
- 高山西高等学校英語科 (編) (2007).  
『高校生英語ディベート授業論~ティーチャーズマ  
ニュアル~』岐阜: 山都印刷.
- 中川智皓 (2008).  
『パラメンタリーディベート練習帳(基本編)』堺市・  
大阪府立大学産官学連携人材等育成事業英語ディベ  
ート研修会テキスト.
- 三熊祥文 (2012).  
「HITチャンツ2011&トーストマスタリング!」  
『大学英語教育学会 (JACET) 中国・四国支部 Oral  
Presentation & Performance (OPP) 研究会 OPP2011  
報告書』23-30.
- 文部科学省 (2009).  
『高等学校学習指導要領』京都: 東山書房.
- 文部科学省 (2010).  
『高等学校学習指導要領解説外国語編英語編』東京:  
開隆堂出版.
- 山田昌宏 (2008).  
「第三章 研究開発の内容 三一七 実践英語」『ノー  
ルダム清心学園清心女子高等学校 平成18年指定SSH  
研究開発実施報告書 第2年次』59-63.
- 『中国地区英語教育学会研究紀要』No. 43 (2012) pp.  
51-60から転載

(本文中の私立A高等学校とは清心女子高等学校, A  
コースとは生命科学コース, Bコースとは文理コース  
である。)